

格 助 詞

小 林 隆

A 解説

1. 格助詞とは

名詞は文の中で、動詞や形容詞などの述語に対して、さまざまな文法的役割をもって結び付いている。この文法的役割のことを「格」と呼ぶ。格は、言語によっては語順や名詞の活用などによって表されるが、日本語においては、名詞の後ろに付く「が」「を」「に」「へ」「で」「から」など一定の独立した形式で示されるのが普通である。これらの形式のことを「格助詞」と呼ぶ。

また、名詞と述語との関係ではないが、名詞と名詞とを結びつける「の」も、ここでは格助詞の仲間を含めて扱うことにする。

2. 日本方言の格助詞

日本方言の格助詞を見渡すには国立国語研究所『方言文法全国地図』（略称 GAJ）が便利である。これは、地理的分布の解明をめざした方言地理学調査の成果であるが、今後の記述研究へのヒントを豊富に含んでいる。第1集「助詞編」を使って、格助詞の方言を概観し、研究上の課題を整理してみよう。

2.1 格助詞が使われないことがある

ガ格： 「雨が降ってきた」（GAJ 1 図）のような言い方が、東北地方や近畿地方を中心に全国各地に見られる。

ヲ格： 「酒を飲む」（GAJ 6 図）のような言い方が、東北、近畿、琉球地方を中心に全国各地に見られる。

ニ格： 「大工がなった」（GAJ 23 図）のような言い方が、秋田と琉球地方に見られる。

ノ格： 「おれが手拭い」（GAJ 13 図）のような言い方が、秋田と琉球地方に見られる。

日本語においては、格は格助詞によって示されると最初に述べた。しかし、実際には

このように格助詞の一部を使用しない方言もある。格の種類に応じた無助詞現象の出現傾向、あるいは、そのような現象を引き起こす文法的システムについて考えてみたい。これは、格表示の方式に関する基本的な検討課題である。

2.2 格助詞の意味が共通語と異なる

ガ： ノの代わりに、「おれガ手拭い」(GAJ13 図)のような言い方をする方言がある。

東北南部、関東東部、山陰、九州地方など。

ノ： ガの代わりに、「雨ノ降ってきた」(GAJ1 図)のような言い方をする方言がある。山陰、九州、琉球地方など。

エ： ニの代わりに、「ここエある」(GAJ24 図)、「息子エ手伝いに来てもらった」(GAJ26 図)のような言い方をする方言がある。中国地方の一部。

カラ： ニの代わりに、「犬カラ追いかけられた」(GAJ27 図)、「息子カラ手伝いに来てもらった」(GAJ26 図)のような言い方をする方言がある。山形・新潟、九州地方など。また、デの代わりに、「船カラ来た」(GAJ29 図)、「一万円カラお願いします」(GAJ30 図)、「運動場カラ遊ぶ」(GAJ28 図)、のような言い方をする方言がある。九州、山陰、琉球地方など。

このように、共通語と同じ形式であっても、その意味が方言によって異なっていることがある。格助詞は形態面について見ると、全体として方言独特のものは目立たず、共通語でも使われる形式が優勢である。しかし、意味的な面に注目すると、顕著な地域差が現れてくる。ガとノ、エとニ、カラとニ・デなど、対立する形式を視野に入れ、共通語・方言間の意味のずれを体系的に記述したい。

2.3 方言特有の格助詞が見られる

コト・トコ： 共通語のオの代わりに、「おれトコ連れて行ってくれ」(GAJ7 図)のように言う。東北地方。

バ： 共通語のオの代わりに、「酒バ飲む」(GAJ6 図)、「おれバ連れて行ってくれ」(GAJ7 図)のように言う。東北北部、九州地方。

サ： 共通語のエやニの代わりに、「東の方サ行く」(GAJ19 図)、「東京サ着いた」(GAJ20 図)のように言う。東北地方、関東東部。

ンカイ： 共通語のニの代わりに、「東京ンカイ着いた」(GAJ20 図)のように言う。琉球地方。

カッテ・ニカッテ： 共通語のニの代わりに、「犬カッテ追いかけられた」(GAJ27 図)のように言う。秋田周辺。

ンティ・ナンティ・ナー： 共通語のデの代わりに、「運動場ンティ遊ぶ」(GAJ28 図)のように言う。琉球地方。

ター： 共通語のヨリの代わりに、「それターあの方が良い」(GAJ31 図)のように言う。中国地方。

このような方言独特の形式の記述も重要である。これらは、中央語において、本来格助詞とは異なる形式として使用されていたものが多い。例えば、コト・トコは名詞「事」、バは係助詞「は」、サは接尾辞+格助詞の「さまに、さまへ」、ンカイも複合形式の「に向かい」が原形と推定される。したがって、これら中央語の形式からいかにして方言の格助詞が成立したかという点も興味深い。いわゆる「文法化 (grammaticalization)」の問題である。なお、ンティは「にて」にあたり、デの原形を方言が残していることになる。中央語の方が文法化を進めた事例である。

2.4 共通語にない基準で使い分けられる

待遇による使い分け： ノとガを、尊卑の区別に応じて使い分ける方言がある。例えば、「先生ノ来られた／泥棒ガ入った」(GAJ 2 図／3 図)、「先生ノ手拭い／泥棒ガ手拭い」(GAJ14／15 図)といった使い分けが山陰、九州地方に見られる。

ウチ・ソトによる使い分け： ノとガを、名詞の内容が自分の所属する世界(ウチ)のものか、そうでない世界(ソト)のものかという世界観によって使い分ける方言がある。例えば、琉球地方に見られる「先生ガ来られた／泥棒ノ入った」(GAJ 2 図／3 図)、「先生ガ手拭い／泥棒ノ手拭い」(GAJ14／15 図)といった区別は、ガ＝ウチ／ノ＝ソトといった基準によるものである可能性がある。

名詞の有生性による使い分け： 名詞は、有生性によって「有生名詞」(人間、動物)と「無生名詞」(無生物、抽象物など)に分けることができる。この違いが格助詞の使用を支配することがある。例えば、東北地方を中心に見られるコト・トコは、「酒ヅ飲む／おれトコ連れて行ってくれ」(GAJ 6／7 図)のように、有生名詞に現れやすいという性格をもつ。

このように、方言の格助詞の使用には、共通語の感覚では見逃してしまいそうな基準が作用していることがある。したがって、対象を分析するには、さまざまな文法的視点を用意する必要がある。そのためには、これから記述しようとする地域の先行研究のみでなく、全国各地の方言や歴史的中央語(日本語史)、世界の言語などから、広範囲な文法知識を導入するのがよい。

2.5 格助詞とは思われない形態がある

名詞と融合を起し、分離できない形態がある。

ガ格： 「あミャー(雨が)降ってきた」(GAJ 1 図)のような形態が、東北、中部、近畿などに見られる。

ヲ格： 「さキョー(酒を)飲む」(GAJ 6 図)のような形態が、長野・山梨・静岡、

中国地方、四国・九州地方の一部に見られる。

ニ格： 「おレー（おれに）貸せ」（GAJ25 図）、「こケー（ここに）ある」（GAJ24 図）のような形態が九州、中国地方の一部に見られる。

これらは名詞末尾の音韻環境に応じて異形態をとるもので、ヲ格では、さキョー（酒を）のほか、例えば、さカー（坂を）、さキュー（先を）、さクー（柵を）、ざコー（雑魚を）のようになる。意味記述の以前に、こうした形態の特徴を整理しておきたい。また、この問題は、通時的には無助詞現象の成立に関わってくる。

ガ格については、形態上、係助詞「は」との区別が問題になる。

雨ア（雨が）降ってきた／あれア（あれは）学校だ（GAJ 1 / 10 図）
のように、ともにアとなる地域が東北北部にある。また、

あミャー（雨が）降ってきた／あリャー（あれは）学校だ（GAJ 1 / 10 図）
のように、同じ形に融合を起こす地域が東北、中部、近畿地方などに見られる。これは、助詞の種類をまたぐ大きな課題に発展する可能性があり、両者の意味的な関連が興味深い。

3 . 調査の着眼点

格助詞の記述調査には、次の2つの方向が考えられる。

- (1) 格の枠組みについての調査
- (2) 特定の形式についての調査

ここでは、(2)の立場での調査項目の設計について解説する。

例として取り上げるのは、東北方言を中心に使用される格助詞サである。サは形態論、意味論、構文論のどの観点から見ても興味深い形式であり、問題の広がり「文法化」など通時的な側面にも広がる。サについて考えることは、他の格助詞の調査にも役立つことと思われる。

3 . 1 形態を確認する

→この部分の解説は、「B 項目」の「1 . 形態を把握する項目」に対応する。

意味の記述を始める前に、形態の確認を済ませておこう。

【名詞末尾の音韻環境による異形態】

2 . 5 で述べたように、格助詞はそれが置かれる前後の音韻環境によって、同じ語でありながら形態を変えることがある。そうした異形態を最初に確認しておかないと、形態の違いを別の語と見誤ったり、助詞が使われていないと錯覚してしまう恐れがある。例えば、九州方言のニは前にくる語の末尾の音によって、次のように相補的な現れ方をする。

a. 長母音・連母音・撥音・1拍語の後： ニ（東京ニ、上ニ、公民館ニ、田ニ）

b. それ以外の後： イ（大阪イ、下イ、郵便局イ、畑イ）

後者のイは前節母音と融合を起こすので、例えば、

ここ＋イ＞こケ（一）

おれ＋イ＞おレ（一）

となり、名詞そのものの形と紛らわしくなる。日本語の格助詞は、カ°（鼻音）、オ、ニ、エなど1拍かつ母音性で独立性の弱いものが多く、異形態を生み出しやすいことに注意が必要である。

サについては、山梨県奈良田方言において、サとニとが交替する現象がある。すなわち、次のようになる。

a. 長母音・連母音・撥音・1拍語の後： サ（東京サ、上サ、公民館サ、田サ）

b. それ以外の後： イ（大阪イ、下イ、郵便局イ、畑イ）

交替のあり方は上記の九州方言におけるニとイの場合と同じである。しかし、こちらは異形態ではなく、サとイという別の格助詞間の交替である点特殊である。おそらく、九州方言と同じニとイの交替が存在したところへ、あとからサが入り込みニの位置に座った過渡的状态と推定される。

一般に、複数の語の使い分けは意味的に説明されることが多い。しかし、このように音韻環境が制限を与える可能性を確認しておかないと、いくら意味の面から調査文を駆使しても結論に行き着かない恐れがある。

なお、「B 項目」の「2. 意味の概要を把握する項目」以下の調査文は、この音韻環境という点に無頓着に作成してある。最初に、当該地点のサが何らかの音韻環境に影響されることが確認できたら、それに合わせて調査文を調整する必要があることを断っておく。

【前接動詞の活用型による異形態】

格助詞の用法としては特殊であるが、共通語のニと同様、サは動詞を受けて目的を表す用法がある。このとき、ッサという形が生じることがある。例えば、宮城県中新田町方言では次のようになる。

一段動詞： 見ッサ、借リッサ

サ変動詞： スッサ、勉強スッサ

ラ行五段動詞： 取ッサ、踊ッサ

ラ行以外の五段動詞： 聞キサ、頼ミサ

動詞の活用型ごとに整理したが、言い切りの形がルで終わる語がッサとなる、と言ってもよい。ただし、その促音が動詞の活用語尾なのかサの一部なのか簡単には判断できない。この点が意味に関わることはないが、動詞の活用型に波及する問題なので注意が必要である。

3.2 意味の概要を把握する

→この部分の解説は、「B 項目」の「2. 意味の概要を把握する項目」に対応する。

意味の記述に駒を進めよう。

まず、意味の概略を把握し、次に特に問題となる点について集中的な調査を行う。このように、二段構えで対象を掘り下げていくのがよいだろう。

さて、方言の格助詞について見ていくとき、おおよそ意味が対応すると思われる共通語の格助詞を手がかりにするのが便利である。特に、内省の利かない方言を調査する場合には、それが有効な方法である。もちろん、共通語と方言とが全面的に対応するケースは稀と言える。最終的には、手がかりとした共通語の枠組みから離れ、方言独自の体系化を図る必要がある。

サの意味は、ほとんど共通語のニの領域に収まる。したがって、共通語のニを手がかりにサの意味の概要を把握してみよう。一部、オの領域に入り込むサの意味も見られるが、この点はあとで考えることにする。

ところで、東北方言のサというとき、「東京サ行く」のような「移動の目標」の意味が有名である。これだと、共通語のエを参考にすれば済むように思われる。しかし、少し観察しただけで、

東京サ着く。(移動の帰着点) -GAJ20 図

おれサ貸す。(授与の相手) -GAJ25 図

花火を見サ行く。(移動の目的) -GAJ21 図

本はここサある。(存在の場所) -GAJ24 図

といった共通語のニに対応する意味もあることがわかる。共通語のエとニとは、ニの意味領域がエの意味領域をほぼ含む関係にある。したがって、サの調査はエよりも広い意味を担うニを手がかりに行うのが適当と言える。また、図1に『方言文法全国地図』の略図を示したように、サは地域によって使用できる意味に違いがある。このことは、通時的変化の段階と方向性の違いが分布に反映されていることを予測させ、複数の地域で記述を進めることの必要性を示唆する。

共通語のニの意味をものさしにして、サの意味の概略を把握するための調査項目を作成すると、「B 項目」の「2. 意味の概要を把握する項目」のようになる(調査文は「へ」を使わず、すべて「に」で統一した)。分布との関連を考えるための便宜として、『方言文法全国地図』にある項目はそれを取り入れた。

3.3 一般化と発達モデル

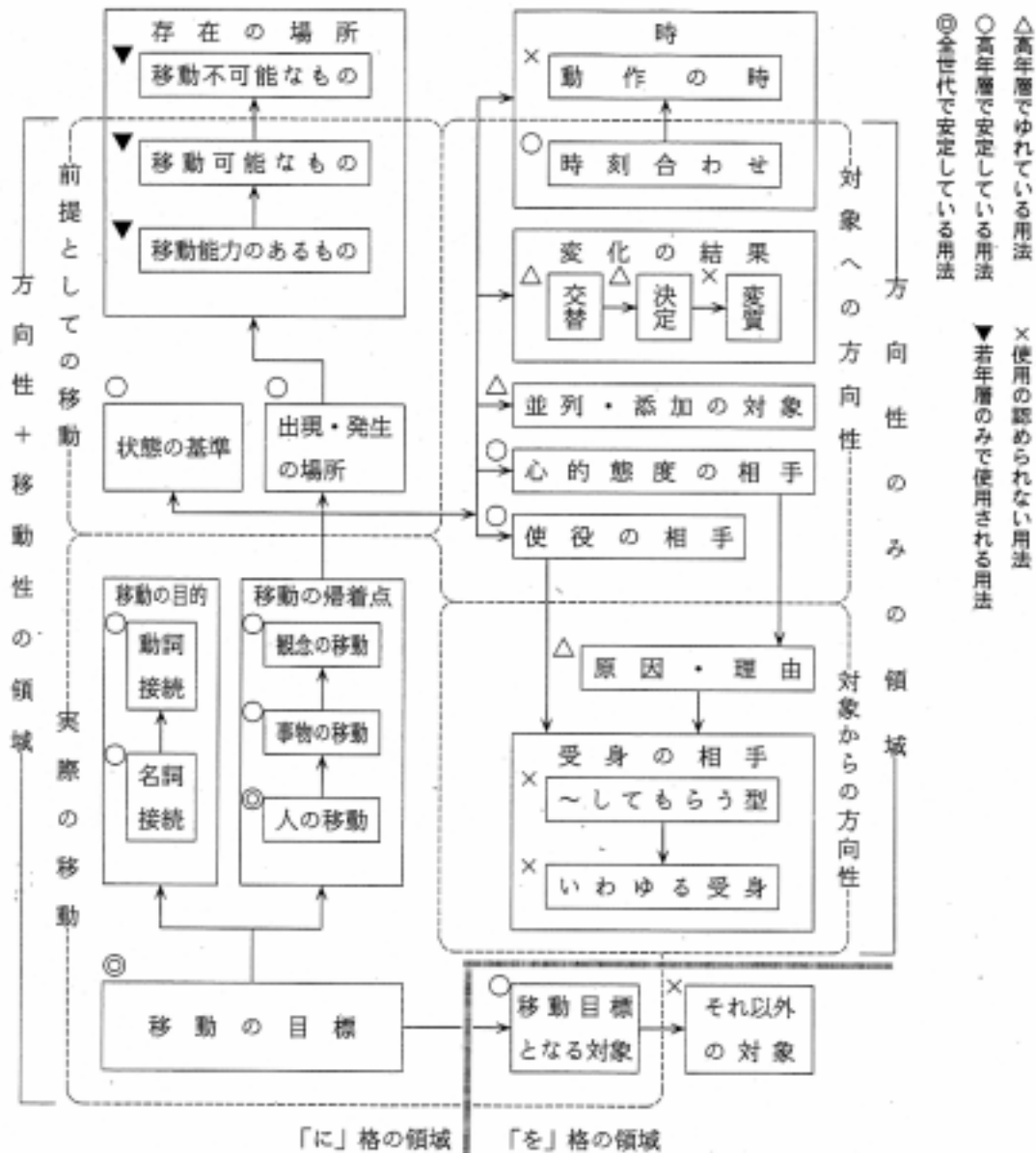
当該の格助詞がもつ個々の用法が把握されると、どのような場合にその格助詞が使えるか(あるいは使えないか)、一般化を試みることができる。サの場合には、共通語のニ

図1 東北方言におけるサの分布領域



『方言文法全国地図』第1集 19～27図をもとに作成した。各図において、サが使用される地域を塗りつぶしてある。原則として、分布領域の広い項目から狭い項目へと配列した。

図2 サの意味の発達モデル



※左下の「移動の目標」を出発点として、矢印の方向に意味が発達したと考える。
 なお、図には宮城県中新田町方言における調査結果を記号で示してある。中新田町では、年齢別の多人数調査も行った。これを見ると、高年層の中でも安定した意味とゆれている意味とがあり、それが意味発達の段階と対応していることがわかる。この点は、地理的分布にも投影されている。また、若年層に向けた新たな意味拡張も見えている。

の意味領域との関係でその意味の広がり一般化することが可能である。

まず、共通語のニの意味領域を、次のように分類してみよう。

a. 方向性＋移動性の領域

a-1. 実際の移動（移動の目標、移動の帰着点、移動の目的）

a-2. 前提としての移動（出現・発生の場所、状態の基準）

b. 方向性のみの領域

b-1. 対象への方向性（使役の相手、心的態度の相手、並列・添加の対象、変化の結果）

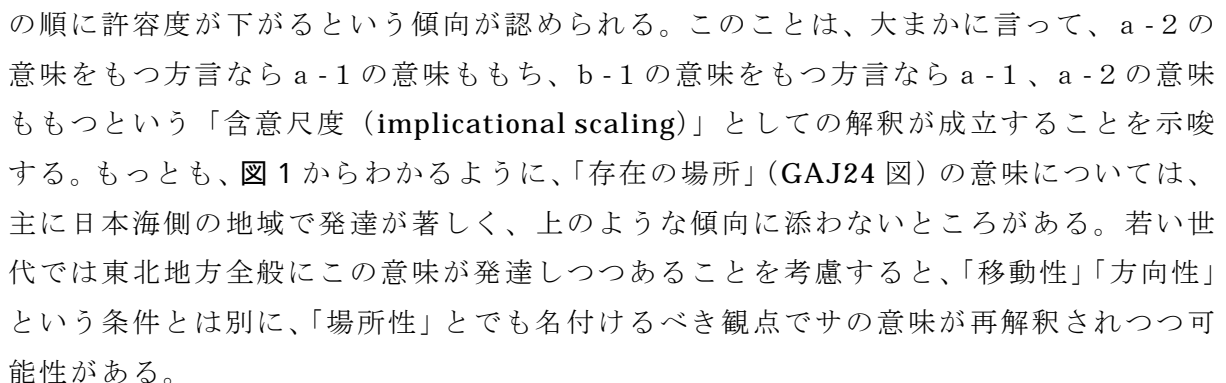
b-2. 対象からの方向性（原因・理由、受身の相手）

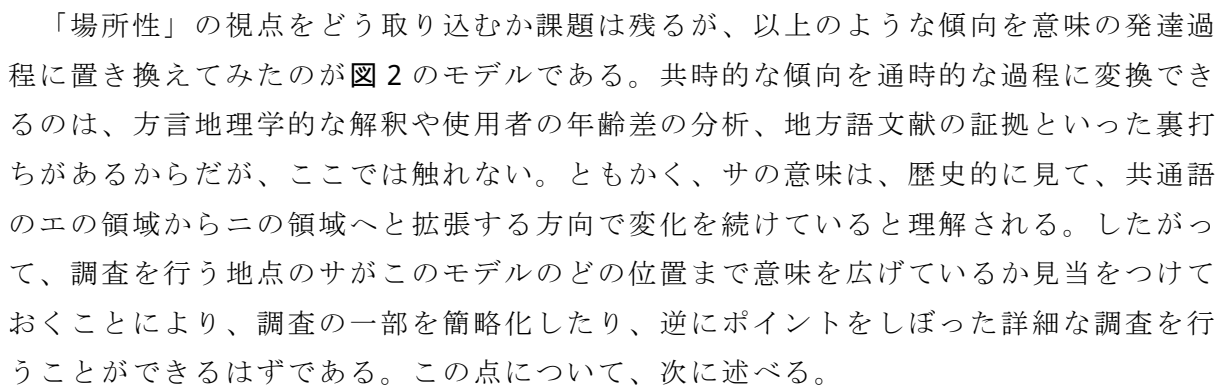
c. それ以外の領域（存在の場所、時）

すると、例えば、宮城県中新田町方言では、a（a-1、a-2）の領域ではサは問題なく使えるが、b-1の領域ではやや使いにくい意味（並列・添加の対象、変化の結果）が現れ、b-2の領域では使えない意味（受身の相手）が出現し、さらに、cの領域になるとサは全く使えないことがわかる。すなわち、中新田町方言のサの使用を支配する意味的条件は、第1に「移動性」、第2に「方向性」であることがわかる。

実は、このようなサの特徴は、中新田町方言にとどまらず、サを使用する方言の多くに共通する傾向と言える。つまり、サの使用は、

$$a-1 > a-2 > b-1 > b-2 > c$$

の順に許容度が下がるという傾向が認められる。このことは、大まかに言って、a-2の意味をもつ方言ならa-1の意味ももち、b-1の意味をもつ方言ならa-1、a-2の意味ももつという「含意尺度 (implicational scaling)」としての解釈が成立することを示唆する。もっとも、からわかるように、「存在の場所」(GAJ24 図)の意味については、主に日本海側の地域で発達が著しく、上のような傾向に添わないところがある。若い世代では東北地方全般にこの意味が発達しつつあることを考慮すると、「移動性」「方向性」という条件とは別に、「場所性」とでも名付けるべき観点でサの意味が再解釈されつつ可能性がある。

「場所性」の視点をどう取り込むか課題は残るが、以上のような傾向を意味の発達過程に置き換えてみたのがのモデルである。共時的な傾向を通時的な過程に変換できるのは、方言地理学的な解釈や使用者の年齢差の分析、地方語文献の証拠といった裏打ちがあるからだが、ここでは触れない。ともかく、サの意味は、歴史的に見て、共通語のエの領域からニの領域へと拡張する方向で変化を続けていると理解される。したがって、調査を行う地点のサがこのモデルのどの位置まで意味を広げているか見当をつけておくことにより、調査の一部を簡略化したり、逆にポイントをしばった詳細な調査を行うことができるはずである。この点について、次に述べる。

3.4 変化の初期段階に位置する方言を調査する

：「移動の目標」について

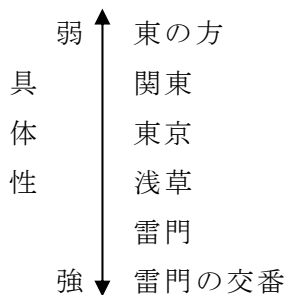
→この部分の解説は、「B 項目」の「3. 変化の初期段階に位置する方言を調査する項目：「移動の目標」について」に対応する。

サの意味について、さらに詳しい調査を行ってみよう。そのとき、掘り下げるべき課題を見極めるために、当該調査地点のサの意味領域が図2のどのあたりまで達しているかを確認しておく必要がある。なぜならば、すでに安定した意味を獲得している領域よりも、使用が不安定な領域、つまり、その地域において、今まさに意味拡張が起こりつつある部分をねらった方が実りある結果が得られると考えられるからである。

サは「移動の目標」を出発点として、最初に「移動の帰着点」へと意味を発達させたと考えられる。サの意味がまだ拡張を始めたばかり段階に位置する方言、例えば、関東周辺部や東北南部の方言を調査する際には、「移動の目標」から「移動の帰着点」に至るの間の用法を細かく調査する必要がある。

【目標地の具体性】

まず、「移動の目標」がどの程度具体性をもつか、といった点でサの使用に違いが出そうである。例えば、サの意味の概要をつかむために提示した調査項目（「B 項目」の「2.1 東の方に行く」）は、移動の目標として「東の方」が設定されているが、これは方向であり、漠然とした目標と言える。これが、例えば、



のように、目標地としての具体性が付与され、帰着点としての理解も可能になるに従い、サの使用が制限されてくる可能性が考えられる。

【複合語の述語】

次に、述語が複合語である場合、サの使用に影響が出ないか見てみる。すなわち、補語として目標地を要求する「行く」と、同じく帰着点を要求する「着く」とが複合した「行き着く」という動詞の場合、サが使えるかどうかという点である。予想としては、最初、複合動詞後項の「着く」に支配されていた補語が、しだいに前項の「行く」の効力を受け始め、ついには単純語「行く」と同じ補語をとるようになる。そして、さらにその影響が単純語「着く」の場合にも及び、結局、「着く」単独でもサの使用が可能になる、といった過程が想定される。

「行く」単独で使用可

↓
「行き着く」でも使用可
↓
「着く」単独でも使用可

3.5 変化の最先端に位置する方言を調査する(1)

:「変化の結果」について

→この部分の解説は、「B 項目」の「4. 変化の最先端に位置する方言を調査する項目(1):「変化の結果」について」に対応する。

ひとくちに「変化の結果」と言っても、それがどのような質の変化であるかによってサの使い方に違いが出る。また、変化前の状態が文中に明示されるか、あるいは、変化を明確に示す動詞が用いられるか、といった構文的な問題もサの使用に影響を及ぼすと考えられる。

まず、変化の質の点では、二つの別個のもの「交替」と、一つのもので姿を変える「変質」とに分けられる。例えば、「窓口が、男の人から女の人になった。」は「交替」、「雨が雪になった。」は「変質」の例である。

次に、変化前の状態が文中に明示されるかどうかという点では、「雨が雪になった。」という文では「雨」が示されているが、ただ「雪になった。」と言ったのではそれがない。また、これらの文で、「なる」を「交替する」「変わる」などに換えた方がより変化の意味が明確になる。

以上の観点を組み合わせ、調査項目の枠組みを示すと次のようになる。

(1) 交替

(1-1) 交替前が明示

A ➡ B (動詞 = 「換わる」)

A → B (動詞 = 「なる」)

(1-2) 交替前が非明示

(A) ➡ B (動詞 = 「換わる」)

(A) → B (動詞 = 「なる」)

(2) 変質

(2-1) 変質前が明示

A ➡ A' (動詞 = 「変わる」)

A → A' (動詞 = 「なる」)

(2-2) 変質前が非明示

(A) ➡ A' (動詞 = 「変わる」)

(A) → A' (動詞 = 「なる」)

(2-3) 変質前が非想定

(φ) → A (動詞 = 「なる」)

最後のケースは、例えば、「6時になった。」のような変化の結果のみに焦点があり、「*5時から6時になった。」のような変化前の状態を一般には想定しないケースを指す。先に、サの意味の概要をつかむために提示した調査項目(「B項目」の「2.14 息子は大工になる」)もこれに該当する。

予想される結果としては、次の各項において、不等号のいずれも左側の方がサの許容度が高いと考えられる。例えば、変化の質については宮城県中新田町方言で、構文的な点については秋田県の若年層にそのような傾向が認められる。

変化の質： 交替 > 変質

変化前の状態： 明示 > 非明示 > 非想定

動詞の種類： 「換わる・変わる」 > 「なる」

これは、3. 3で述べたサの意味発達の過程における「まず「移動性」の領域へ、次いで「方向性」の領域へ」という原則に従う傾向と言える。すなわち、「変質」より「交替」の方が空間的な移動を想像することが可能であり、また、変化前の状態を明示したり、「なる」より「換わる・変わる」を用いたりした方が、方向性が明瞭に示されることになる。そのため、サが使いやすくなるのではないかと考えられる。

3. 6 変化の最先端に位置する方言を調査する(2)


:「存在の場所」について

→この部分の解説は、「B項目」の「5. 変化の最先端に位置する方言を調査する項目(2):「存在の場所」について」に対応する。

【存在主体の「移動性」】

共通語の二は「存在の場所」の意味をもつ。3. 2では、サがこの意味用法で使用されるか見るために、

本はここにある。(「B項目」の2.8)

という調査文を用意した。しかし、これまでの調査によると、この用法でのサの使用には統語論的な条件、すなわち、「主格となる名詞の有生性」が関わっていることがわかっている。つまり、主格となる名詞が有生名詞か、無生名詞かによって、その存在場所を表示するサの使用に違いが現れる。一般的には、有生名詞の方が無生名詞よりサが使われやすいという傾向がある。したがって、調査地点のサの意味が、2で「存在の場所」付近まで拡張してきていることが予想される場合には、この点について掘り下げた調査を行ってみるとおもしろい。

ところで、無生名詞の場合でも、さらに細かく観察すると、それが指し示す事物がペンや本といった小規模なものである場合にはサが使用されやすく、山や建物といった大

規模なものである場合には使われにくい、という傾向がある。このことを考慮すると、存在する主体の性質として、それ自身が移動能力をもつかどうか、あるいは、移動能力をもたなくとも簡単に移動させることが可能かどうか、といったより広範囲な「移動に関わる性質」(=「移動性」と呼んでおく)が決め手になっているのではないかと思われる。したがって、「有生性」よりも、「移動性」の視点からこの現象をとらえる方がより包括的な説明が可能と考えられる。そこで、この点に関わる調査項目の分類を次のように整理しておく。

○存在主体の「移動性」

- a. 移動能力あり
- b. 移動能力なし
 - b-1. 被移動性あり
 - b-2. 被移動性なし

予想としては、 $a > b$ ($b-1 > b-2$) の順にサの許容度が落ちると考えられる。例えば、福島県小高町方言では、 a と $b-1$ ではサが使えるが、 $b-2$ では使えないという結果が得られている。

【前提としての移動】

サが「存在の場所」の意味をもつに至ったのは、その存在が移動の結果として理解されるような状況が契機になっているのではないかと推測される。別の言い方をすれば、存在の前提として移動が想定される場合があるということである。例えば、

おれは家サいる。

なら、

昨日は旅行に出ていたが、今日は家に帰ってきて…

といった状況が、

本はここサある。

なら、

さっきまで机の上にあったが、今はこちらに持ってきて…

といった状況が考えられる。したがって、サが「存在の場所」の意味を獲得する過程には、このように、前提としての移動が想定されやすい文脈からまず使用が開始される可能性がある。したがって、この点を確認する調査も有意味なはずである。

【存在の補助動詞】

もう一点、確認したいことがある。それは、「いる」「ある」が補助動詞として使われた場合のサの使用である。「いる」「ある」は単独では「存在の場所」を表す補語を要求するが、補助動詞として使用された場合、本動詞の補語の意味役割との関係が問題になる。例えば、「東京に行っている」において、「行く」の方に焦点がある場合には、「東京」は「移動の目標」の解釈になり、「いる」の方に焦点がある場合には、「東京」は「存在

の場所」の解釈になる。

サが「存在の場所」の意味を獲得し、単純語「いる」「ある」の場合でも使用されるに至る過程には、「いる」「ある」が補助動詞として用いられたときにまず使用が許可されるという段階が認められる可能性がある。

東京に行く。(移動の目標)

↓

東京に行っている。(移動の目標＋存在の場所)

↓

東京にいる。(存在の場所)

この点の調査も興味深い。

3.7 他の格との関係に視野を広げる

→この部分の解説は、「B 項目」の「6. 他の格との関係に視野を広げる項目」に対応する。

ここでの基本的な方法は、共通語の格助詞ニの意味を手がかりに、方言のサの意味を把握するというものである。すなわち、ニ格の領域におけるサの使用範囲を確認する作業が中心になる。ところが、サは共通語であれば格助詞オで表すヲ格の領域に踏み込んで使用されることがある。

【移動の目標としてのヲ格】

さて、ヲ格は主に「対象」を意味するが、その対象に対する動作が移動を含むものである場合には、サが使用されることがある。例えば、宮城県中新田町方言では、共通語なら、

兎オ追いかける。

と言うべきところを、

兎サ追いかける。

とすることができる。これは、名詞句「兎」の格が「移動の目標」という共通語のニ格相当の意味役割で理解できるからではないかと考えられる。これに対して、共通語で、

兎オつかまえる。

兎オ育てる。

となる二つの文においてはどうかであろうか。前者は「～追いかける」の場合に比べて「移動の目標」の解釈は難しくなるが、それでも兎に接近する何らかの移動行為を想像することはできなくはない。これに対して、後者になると、もはや兎への移動は考えることができない。おそらく、「～追いかける」>「～つかまえる」>「～育てる」の順に、サの許容度も下がってくることが予想される。中新田町方言では、「～追いかける」の場合のみサが可能である。この点を簡略に図示すれば次のようになる。

「移動の目標」としての解釈の可能性： 強 ←————→ 弱

サの使用の許容度： 強 ←————→ 弱

【場所の意のヲ格】

もうひとつ注目したいのは、ヲ格に「場所」の意味があることである。例えば、共通語で、

穴オ掘る。

たとえば、このヲ格の意味役割は「対象」であるが、

ここオ掘る。

橋オ渡る。

バスオ降りる。

と言うときのヲ格の意味役割は「場所」であり、より詳しくは、それぞれ「めあての場所」「過ぎる場所」「離れる場所」ということになる。これらの「場所」の意味でサが使用されないか調査してみるのも興味深い。先に述べたように、サの使用地域では「存在の場所」の意味が発達している地域があるが、それらの地域で、こうしたさまざまな「場所」の用法も合わせて可能であるということになると、「移動性」「方向性」といった観点とは別に、「場所性」という観点からサの使用を理解する必要が出てくる。

3.8 他の品詞との関係を考える

→この部分の解説は、「B 項目」の「7. 他の品詞との関係を考える項目」に対応する。

ここで話題にしているのは格助詞のサであり、その主たる使用地域は東北方言である。しかし、全国を見渡すと、これと似た形式は九州方言でも使われている。その特徴を東北方言と比較する形でまとめれば次のようになる。

〔形態〕

東北方言：単純（サのみに統一）

九州方言：複雑（サイ、サン、サナー、サネ、サマーなど2拍以上の形態が豊富）

〔意味〕

東北方言：接尾辞的性質はもたず、完全に格助詞として機能している。その意味は広く、共通語のエの意味領域を越え、ニの意味領域と相当に重なる。

九州方言：格助詞的機能のほかに、「方向・方面」の意を添える接尾辞的機能も併せもつ。ただし、格助詞的機能は、「移動の目標」の表示を中心とする用法にほぼ限られている。

歴史的に見ると、東北方言のサは平安・鎌倉時代の中央語である「接尾辞サマ+格助詞ニ（ないしエ）」という形式に遡る。この接尾辞のサマは「方向・方面」の意を表していた。したがって、現在の九州方言に見られる形式は、歴史的中央語の面影を強く残し、

東北方言のサへと発展する初期的段階に位置するものと考えられる。

こうした歴史的な変化については「4. 発展」であらためて扱うが、いわゆる「文法化」による格助詞の成立を考えるには、サの歴史は格好の事例と言える。特定地点の格助詞の記述という静的な目的を離れ、複数地点の比較から格助詞の発生過程に論を及ぼすためには、原型から格助詞に至る段階を反映する方言も対象にする必要がある。むしろ、記述調査の調査地点を選定する場合、あらかじめ、歴史的な視点から重要と思われる地点を積極的に選んでおくのがよいであろう。

ところで、今、そのような地点の候補として九州方言を取り上げたが、九州方言の一部には格助詞化に向けた変化が進行しつつある地域も見られる。したがって、調査地点を適切に設定すれば、九州方言内部でサの類の格助詞化の段階を追うことができるかもしれない。また、九州方言に比べ、はるかに劣勢であるものの、八丈島など関東方言の一部にもそれと似たようなサの類が存在する。東北方言のサとの関係では、地域的に連続する関東方言のサの類の調査も重要である。

さて、格助詞サの前段階に位置するこれらの方言を調査するにあたっては、形態と意味の両面に注目する必要がある。格助詞の成立に至る過程では、形態変化と意味変化の並行性が想定されるからである。

まず、形態面では、当該方言が次の変化のどの段階に位置するか見極める必要がある。

原型		終点
サマ+ニ（・エ）	—————→	サ

サはサマとニ（・エ）とが形態上、融合を起こし、さらに末尾の摩擦によって成立したと考えられる。したがって、変化の極初期に対応する方言では、元の形（サマニ、サマエ）に近い形が観察されると予想される。逆に、変化の最終段階に近い方言ではほとんどサになりかかった形が現れるはずである。後者の場合、サーと長音化したり、サンと鼻音加わるなど微妙な発音になっているため、先入観でサと聞き誤ってしまう恐れがある。曖昧な発音は話者の内省を確認するなど注意が必要である。

次に、意味的な面では、接尾辞的機能、すなわちこの場合には「方向・方面」の意を調査地点のサの類がもつかがポイントになる。変化の初期段階ではこの機能が明瞭に認められ、変化の最終段階ではこの機能はほとんど現れてこないはずである。

原型		終点
「方向・方面」の意あり	—————→	「方向・方面」の意なし

「方向・方面」の意をその方言形式がもつか否かを調べるためには、さまざまな方法がありうるが、基本的には、

- A. 駅に行った。(目標)
- B. 駅の方に行った。(方向)

といった2つの調査文を対比的に提示し、サの類の現れ方を確認するという方法が考え

られる。当該方言のサの類が接尾辞的機能をもつならば、Bの調査文の「の方に」の部分全体がサの類に置き変わるはずである。反対にAの調査文では別の助詞が使われるであろう。ちなみに、宮崎県日南市方言では、

A. {駅ニ、ないし、えキ} 行った。

B. 駅サメ 行った。

となる(Aのえキは格助詞イが末尾に隠れている)。これが、サの類が接尾辞的機能をもたない方言だと、例えば、宮城県中新田町方言の場合、

A. 駅サ 行った。

B. 駅ノホーサ 行った。

のようになり、A・Bともにサが使用され、その区別はBで「方向」を表す形式「ノホー」が挿入されることでなされる。

サの類が接尾辞的機能を保持する方言では、日南市方言のように、A・Bの区別ははっきり現れるが、格助詞化を進めた方言では、それが曖昧になってくる。したがって、まさに手を換え品を換え、さまざまな方法でこの区別を確認していく必要がある。

例えば、上の方法とは逆に、調査者側であらかじめ得られたサの類を使って方言文を作り、それが限定的な目標を表すか、漠然とした方向の意味で使うか話者に確認するという方法がある(「B 項目」の「7.2 意味確認調査」。あるいは、臨場感を出すために、実際の会話を想定した調査を工夫することも必要である(「B 項目」の「7.3 場面想定調査」)。また、接尾辞的機能をもつサの類は、「どっち」「あっち」「右」「北」など、方向を表す名詞と相性がよく、それらに付きやすいという性質がある。したがって、限定的な目標を表す名詞(駅、役場、浜など)にはサの類は付かないが、方向を表す名詞には付くということがわかれば、そのサの類にはもともと接尾辞的機能が含まれていた可能性がある(「B 項目」の「7.4 方向名詞による調査」)。

4 . 発展

4 . 1 通時論的記述研究

東北方言を中心に使用されるサを事例として、格助詞記述の着眼点や方法について述べてきた。記述そのものは共時的な作業であるが、各地の記述の結果を比較することによって通時的な考察が可能になってくる。これは、次の段階の課題である。しかし、ここでの方法がそうであるように、あらかじめ通時的な変化の見通しを立て、それに合わせて調査項目を設定するという方法がある。また、調査地点についても、変化の各段階を反映すると思われる方言を重点的に選ぶやり方もある。「通時論的記述研究」とでも名付くべきこのような方法は、歴史的な考察への発展を見越したものである。

4.2 格助詞の文法化

方言の格助詞を対象とした歴史的研究では、格助詞の成立や変容など「文法化」が課題のひとつとなるはずである。すなわち、当該の格助詞が名詞や間投助詞など他の品詞から転成し、成立する過程や、逆に、終助詞など別の形式に転成していく様子を視野に入れた研究が考えられる。

他の品詞 → 格助詞 → 他の品詞

全体を視野に入れる

例えば、サについては格助詞としての成立が問題になる。接尾辞と格助詞との複合形式であるサマ+ニ（・エ）が格助詞サに変質していく過程、あるいは、一旦成立した格助詞サがその機能を広げていく様子を明らかにしてみたい。

今、サの類の文法化を考えるために、次の4つの観点を用意した。

[一語化] 形態上、接尾辞と格助詞とが分離できず一語化しているか。

[短縮化] 形態が摩滅し一拍にまで至っているか。

[格助詞化] 接尾辞としての語彙の意味を放棄し格助詞化しているか。

[意味拡張] 格助詞として意味拡張を起こしているか。

これらの観点から、各地方言および歴史的中央語をのサの類を整理すれば、次のようになる。

	一語化	短縮化	格助詞化	意味拡張	「文法化」
中古・中世前期中央語	×	×	×	×	↓
現代九州方言および 関東西端部方言	○	△	×(△)	×	
その他の現代関東方言	○	○	○	×	
現代東北方言	○	○	○	○	

この場合、一語から二語への分割、形態の延長、格助詞から接尾辞への変質といった変化は理論的に認めがたい。したがって、基本的に×が減り○が増える方向での推移が考えられる。すなわち、文法化はこの表の上から下へと進行したのであり、表に挙げた歴史的中央語および各方言は、それぞれ文法化の各段階と対応しているという解釈になる。

もちろん、これは全国的な視野から変化の大筋を描いて見せたまでである。ひとくくりにした九州方言の内部でも文法化の程度に違いが予想される。東北方言にしても、格助詞としての発達に、度合いや方向の違いが認められることは先に述べたとおりである。このようなアウトラインをより詳細なものにしていくことは、今後の課題である。

5 . 参考文献

- 飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編（1982～1986）『講座方言学』1～10（国書刊行会）
- 井上史雄（1992）「社会言語学と方言文法」『日本語学』11-6 臨時増刊号『方言地図と文法』
- 内間直仁（1990）『沖縄言語と共同体－ウチ社会の意識とことば－』（社会評論社）
- 国立国語研究所（1989）『方言文法全国地図』1（大蔵省印刷局）
- 小林 隆（1995）「東北方言における格助詞「サ」の分布と歴史」『東北大学文学部研究年報』44
- 小林 隆（1998）『アンバランスな周圏分布の成立』文部省科学研究費成果報告書
- 佐々木冠（1998）「水海道方言の対格－有生対格と無生対格の統語論－」『日本語科学』4
- 仁田義雄（1992）「格表示のあり方をめぐって－東北方言との対照のもとに－」『日本語学』11-6 臨時増刊号『方言地図と文法』
- 日高水穂（1999）「ことばに関するアンケート調査」『秋田大学ことばの調査』
- 日高水穂（2000）「文法化の過程と地理的分布」『日本方言研究会第70会研究発表会発表原稿集』
- 福島秩子（1992）「新潟方言の格助詞「カラ」の用法をめぐって」『日本語学』11-6 臨時増刊号『方言地図と文法』

格助詞サについての解説は、小林隆（1995・1998）をもとに行った。詳しい参考文献はそちらに譲る。また、その後発表された日高水穂（1999）は、ここでの調査項目の作成にたいへん参考になった。日高氏からは、格助詞全般についても直接ご教示を得た。なお、小林隆（1998）は科研費の報告書であるため、手に入りにくいかもしれない。まだ在庫があるので、下記にご連絡いただければ差し上げることができる。

kobataka@sal.tohoku.ac.jp

B 項目

これは、東北方言などで使用される格助詞サの記述を事例として取り上げたものである。

1 . 形態を確認する項目

→解説は、「3. 1 形態を確認する項目」を参照のこと。() 内には調査項目設定に関わる諸条件をメモした (以下同じ)。

1.1 名詞末尾の音韻環境による異形態

- 1.1.1 東京に行く。(有標：長母音)
- 1.1.2 大阪に行く。(無標)
- 1.1.3 上(うえ)に行く。(有標：連母音)
- 1.1.4 下(した)に行く。(無標)
- 1.1.5 公民館に行く。(有標：撥音)
- 1.1.6 郵便局に行く。(無標)
- 1.1.7 田に行く。(有標：1拍語)
- 1.1.8 畑に行く。(無標)

1.2 動詞の活用型による異形態

- 1.2.1 花火を見に行く。(一段動詞、2拍)
- 1.2.2 ビデオを借りに行く。(一段動詞、3拍)
- 1.2.3 ゲートボールをしに行く。(サ変動詞)
- 1.2.4 勉強しに行く。(サ変動詞)
- 1.2.5 忘れ物を取りに行く。(ラ行五段動詞、2拍)
- 1.2.6 ダンスを踊りに行く。(ラ行五段動詞、3拍)
- 1.2.7 落語を聞きに行く。(ラ行以外の五段動詞、2拍)
- 1.2.8 応援を頼みに行く。(ラ行以外の五段動詞、3拍)

2 . 意味の概要を把握する項目

→解説は、「3. 2 意味の概要を把握する」を参照のこと。

2.1 東の方に行く。(移動の目標) GAJ19 図

- 2.2 東京に着く。(移動の帰着点一人の移動) GAJ20 図
- 2.3 本をここに置く。(移動の帰着点一事物の移動)
- 2.4 その本をおれに貸せ。(移動の帰着点一事物の移動 <授与の相手>) GAJ25 図
- 2.5 仕事に行く。(移動の目的一名詞接続) GAJ22 図
- 2.6 花火を見に行く。(移動の目的一動詞接続) GAJ21 図
- 2.7 庭に草が生える。(出現・発生の場所)
- 2.8 本はここにある。(存在の場所) GAJ24 図
- 2.9 おれの家は駅に近い。(状態の基準)
- 2.10 孫に窓を開けさせる。(使役の相手)
- 2.11 嫁に気を使う。(心的態度の相手)
- 2.12 今日の寒さにはまいる。(原因・理由)
- 2.13 兄弟は兄二人に姉一人だ。(並列・添加の対象)
- 2.14 息子は大工になる。(変化の結果) GAJ23 図
- 2.15 息子に手伝いに来てもらう。(受身の相手-「~てもらふ」型) GAJ26 図
- 2.16 犬に追いかけられる。(受身の相手) GAJ27 図
- 2.17 毎朝6時に起きる。(時)

3. 変化の初期段階に位置する方言を調査する項目

：「移動の目標」について

→解説は、「3. 4 変化の初期段階に位置する方言を調査する：「移動の目標」について」を参照のこと。

3.1 目標地の具体性

- 3.1.1 東の方に行く。 (弱)
- 3.1.2 関東に行く。 (具)
- 3.1.3 東京に行く。 (体)
- 3.1.4 浅草に行く。 (性)
- 3.1.5 雷門に行く。 ()
- 3.1.6 雷門の交番に行く。 (強)

3.2 複合語の述語

- 3.2.1 東京に行く。(単純語「行く」)
- 3.2.2 東京に行き着く。(複合語「行き着く」)
- 3.2.3 東京に着く。(単純語「着く」)

4．変化の最先端に位置する方言を調査する項目(1)

：「変化の結果」について

→解説は、「3. 5 変化の最先端に位置する方言を調査する(1)：「変化の結果」について」を参照のこと。

- 4.1 窓口が、男の人から女の人に換わる。(A → B)
- 4.2 窓口が、男の人から女の人になる。(A → B)
- 4.3 窓口が、女の人に換わる。((A) → B)
- 4.4 窓口が、女の人になる。((A) → B)
- 4.5 午後から、雨が雪に変わる。(A → A')
- 4.6 午後から、雨が雪になる。(A → A')
- 4.7 午後から、雪に変わる。((A) → A')
- 4.8 午後から、雪になる。((A) → A')
- 4.9 今日は雪になる。((φ) → A)
- 4.10 6時になる。((φ) → A)
- 4.11 元気になる。((φ) → A)

5．変化の最先端に位置する方言を調査する項目(2)

：「存在の場所」について

→解説は、「3. 6 変化の最先端に位置する方言を調査する(2)：「存在の場所」について」を参照のこと。

5.1 存在主体の「移動性」

- 5.1.1 本はここにある。(移動能力なし／被移動性あり)
- 5.1.2 役場は駅前にある。(移動能力なし／被移動性なし)
- 5.1.3 車は家にある。(移動能力あり<間接的能力>)
- 5.1.4 おれは家にいる。(移動能力あり<直接的能力>)
- 5.1.5 魚は海にいる。(移動能力あり<生物>)
- 5.1.6 魚は冷蔵庫にある。(移動能力なし<材料＝被移動性あり>)

5.2 前提としての移動

- 5.2.1 おれはいつも家にいる。(一般的論として)
- 5.2.2 おれは今日は家にいる。(昨日は旅行に出ていたが、今日は家に帰ってきているという状況設定で)
- 5.2.3 本はいつもここにある。(一般的論として)

5.2.4 本は今はここにある。(さっきまで机の上にあったが、今はこちらに持ってきているという状況設定で)

5.3 存在の補助動詞

5.3.1 太郎は東京に行く。(移動の目標)

5.3.2 太郎は東京に行っている。(移動の目標＋存在の場所)

5.3.3 太郎は東京にいる。(存在の場所)

5.3.4 本はここに置く。(移動の帰着点)

5.3.5 本はここに置いてある。(移動の帰着点＋存在の場所)

5.3.6 本はここにある。(存在の場所)

6 . 他の格との関係に視野を広げる項目

→解説は、「3.7 他の格との関係に視野を広げる」を参照のこと。

6.1 移動の目標としてのヲ格

6.1.1 兎を追いかける。(「移動の目標」としての解釈が可能)

6.1.2 兎をつかまえる。(「移動の目標」としての解釈がやや可能)

6.1.3 兎を育てる。(「移動の目標」としての解釈が不可能)

6.1.4 後ろを向く。(「移動の目標」としての解釈が可能)

6.1.5 後ろを見る。(「移動の目標」としての解釈がやや可能)

6.1.6 頭の後ろをなでる。(「移動の目標」としての解釈が不可能)

6.2 場所の意のヲ格

6.2.1 穴を掘る。(対象)

6.2.2 ここを掘る。(めあての場所)

6.2.3 橋を渡る。(過ぎる場所)

6.2.4 バスを降りる。(離れる場所)

7 . 他の品詞との関係を考える項目

→解説は、「3.8 他の品詞との関係を考える」を参照のこと。

7.1 基本調査

7.1.1 A. 駅に行った。(目標)

7.1.2 B. 駅の方に行った。(方向)

7.1.3 A. 役場に行った。(目標)

7.1.4 B. 役場の方に行った。(方向)

7.1.5 A. 浜に行った。(目標)

7.1.6 B. 浜の方に行った。(方向)

7.2 意味確認調査

調査文 「駅 [当該地点のサの類を挿入] 行った。」

例：駅サメ 行った。

この文の意味は次のどちらか。

① 駅に行った。(目標)

② 駅の方に行った。(方向)

7.3 場面想定調査

次郎から太郎を見なかったかと聞かれて、「太郎なら、今、役場（の方）に行ったぞ」と答える場合、次の2つの状況を想定して回答してもらおう。

① 話者も太郎を見かけただけで、彼の行く先ははっきりしないが、ともかく役場の方に行ったことは明らかな場合。

→「太郎なら今役場の方に行ったぞ。」

② 話者は太郎に会い、彼の口から直接、これから役場に用事に行くところであることを聞かされた場合。

→「太郎なら今役場に行ったぞ。」

7.4 方向名詞による調査

7.4.1 どっちに行く。

7.4.2 あっちに行く。

7.4.3 右に行く。

7.4.4 北に行く。